



桃三小では、畑を用意し皆で野菜を育てていた  
 (写真撮影:稲神政喜さん/イナガミ写真館)  
 (写真提供:稲神壽志さん)

縫製などの仕事をしました。勤労働員になると学年単位、クラス単位で割り当てられた工場、作業所に行きました。直接動員先へ登校するような感覚で工場の仕事時間に準じて仕事をしました。勉強は多分事務所の状況で適時授業をしていたと思います。

私の中学では、2年生(60名×4クラス)は月曜から土曜まで直接府中競馬場の厩舎に行き、8時から4時くらいまで軍馬の飼育に従事しました。競走馬は北海道に疎開させ、全国から重いものを運ぶのに適した馬が集められてきました。馬房掃除、馬のブラシかけ、水・餌やり、運動を兼ねて多摩川の河原まで連れて行き、草を食べさせ、水を飲ませます。その間我々は飼料の一部にするために土手の草刈りをして、帰り道はその草を馬に乗せて厩舎に帰る、それが午前の日課で、馬の健康管理が任務でした。午後は運搬用荷車の装着訓練と、荷馬車を引いて土手を上り下りする行軍訓練でした。これは米軍が九十九里に上陸した時には、輜重兵(しちょうへい/現在は後方部隊)として物資を前線へ補給することが我々の本当の任務だったのです。

自分が世話をする馬にだんだん慣れてきて、馬の感情が伝

わるようになってきました。馬から頬を寄せてくるようにもなり愛情が深まりましたが、たまに馬同士の争いに巻き込まれることもありました。私たちは8月15日以降も馬の世話をする人手がないということで、何か月かは馬の世話に通っていました。

中学3年生で物資の補給部隊としての任務を持たされて訓練していました。勿論戦闘の真っ只中にいるわけですから今思えば戦争の一端を担っていたことになるのです。

#### ■ 情報を知る術と判断する能力が欲しかった

広島、長崎に新型爆弾(原子爆弾)が投下されても、その実態が分からないまま不安な日々を送りました。白い服を着ていれば安全だ、白い色は敵の戦闘機の目標になりやすいからダメだ、次は大阪だ、名古屋だ、東京だ、何時何処へ落とされるのかと話のタネになっていました。

当時の情報収集手段といえば、西荻窪の映画館で見る「日本ニュース(昭和15<1940>年から終戦をはさみ、昭和26<1951>年まで制作されたニュース映画)」やラジオで、検閲された情報を聞かされていたわけです(▶参照P18)。現代は情報はあふれていますが、やはりどのように受け止めてどう判断するかはとても大切なことです。

国内では原発問題、海外では戦争、内戦など、お金や技術だけで解決できない私たちの未来に関わる問題もあり、じっくりと対話をしていくことが、とても大切なことだと思います。

兵站:▶参照 P20

## 建物強制疎開からケヤキ並木へ



## 坂井 益夫さん

阿佐谷パールセンター商店街「とらや椿山」二代目。昭和4（1929）年生まれ。

日大二高、大倉高商（現在の東京経済大学）卒業。学生時代より和菓子作りの修行を積み、35歳で店を任せられる。東京並びに全国和菓子協会役員を務める。平成12（2000）年に引退。現在86歳。

マイタウン阿佐谷協議会常任相談役。

私どもの店は大正14（1925）年、現在パールセンターになっている阿佐ヶ谷南本通り商店会に父・坂井寅三郎が開業しました。戦前、中杉通りはなく、阿佐谷を南北に通じる道路は南本通りが旧道で、バスも走っていました。道が狭いのでバスが交差する時は各商店で日除けをあげるの、それは大変でした。

私は5人兄弟の長男で、昭和4（1929）年、お店の2階で生まれました。戦争が始まった頃は小学生で、戦況が激しくなると、友だちと外で遊ぶことはできなくなりました。お店も材料が手に入らず、学校給食用の味噌パンを作って売ることがありましたが、ほとんど仕事はありませんでした。どこも食べる物がなかったので、味噌パンを作った時は友だちに配ったり、うちに来れば甘いものがあるからと、よく友だちが遊びに来たりしていました。



昭和5年頃のお店の様子



戦前の商店街の様子

### ■ 命令から10日間で取り壊し

昭和20（1945）年1月、阿佐谷でも建物強制疎開（参照▶P18）が始まり、駅周辺の酒屋、写真屋、市場など目立つ建物が取り壊されました。その後、3月10日の東京下町大空襲を受け、20日には駅を挟んで南北に50メートル幅で強制疎開の命令が出され、私の家も疎開することになりました。

当時、私は日本大学第二中学校の商業科へ入学したばかりでした。母と弟たちは母の実家の茨城に疎開（参照▶P18）していて、店には父と私、小僧さん2人とお手伝いさんが残ってい

ました。それまで小僧さんが12、3人いたのですが、みんな徴用で吉祥寺の日本無線や近くの軍需工場に働きに出ていました。

命令が出て、取り壊しまで10日間。補償金は多少ありましたが、少しでも現金に換えたいと、どこも店先に道具を並べて売っていました。包装紙や袋、水引、器、番重（菓子を運ぶ箱）と、もうなんでも。引越し先もないので、みなさん縁故疎開したり家を探したり、大慌てであちこちに移りました。私たちは馬橋の大きな米屋が疎開して空いていたので、そこを借りることに。家財道具や店と工場のをムシロに包んで、リヤカーに乗せて何往復もしました。



強制疎開を受け、引越しの荷造りをする商店会の人たち

取り壊しが始まると、軍隊や勤労奉仕者が家の柱に縄をつけ「だーん、だーん」と引き倒していきました。土埃が舞って、すごい騒ぎでした。たった10日間で防火ベルト地帯になり、しばらくは瓦礫の山で通れませんでした。駅周辺の川端市場があった広い空き地には、大きな防空壕（参照▶P20）がいくつかできたのが記憶に残っています。

### ■ 猛火に包まれた阿佐谷

2か月後の5月25日の空襲（参照▶P18）では、阿佐谷も猛火に包まれました。リヤカーに荷物を積み、用意してあった布袋に2匹の猫を入れ、成宗田圃まで逃げて夜を明かしました。地を這うような煙ですごかったです。阿佐谷は駅周辺と中央線沿いに杉並第七国民学校（現・杉並第七小学校）方面にまで被害が及びましたが、強制疎開の防火ベルトがなければ現在の

街並みはもっと変貌していたでしょう。駅北口にあるケヤキ屋敷(相沢邸)が焼け、周辺のケヤキが三日三晩、ネオンのように燃えていた光景は忘れられません。

3か月後に終戦を迎え、まもなく商店会の人たちが戻ってきました。駅前広場は闇市でうまり、土地を返してもらうのに苦労しましたが、地主や住民たちが団結して街づくりが始まり、中央線沿線の各駅前の中でも阿佐谷の復興は早かったようです。

戦後、地域の人々が強制疎開でできた防火ベルト地帯に南北幹線道路建設をと請願したことで都道補助133号線に指定され、昭和28(1953)年に阿佐ヶ谷駅南より青梅街道まで中杉通りが開通しました。ケヤキ屋敷のケヤキが数本焼け残ったこともあり、父が「阿佐谷の土壌にはケヤキが適しているはずだ」と街路樹にケヤキを植えるように勧め、地域住民の寄付によってケヤキの苗木119本が植樹されました。ケヤキは復興を目指す街の象徴にも見えました。建物疎開がなければ今のケヤキ並木はありませんでした。



当時の様子は坂井益夫さんの父、寅三郎さんの自伝にも書かれている。

「二十年一月になると、東京都内の繁華街に防火地域が指定され、その地域内の建物は強制疎開といってとりこわしの命令がこちらこちらに出された。このあたりでは阿佐ヶ谷駅周辺が第一に指定され、駅北口の玉野酒店、踏切付近の写真店などがとりこわしの命令を受け、私どもも勤労奉仕に出動させられた。また、都内はときどき夜間にB29(参照▶P20)の来襲があり、こちらこちら焼け出される人があるのがあたりまえのようになった。久しぶりに知人に逢うと、まだ焼けませんというのが不思議なくらい。二度も焼かれたという不運な人も出てきた。四谷の三原堂主人の奥様が焼夷弾(参照▶P20)の直撃で死亡されるという悲しい報せもあった。」

「(三月)二十日に帰京してみると、こんどは店が防火地帯に入っていて強制疎開。三月三十一日までに退去するよう命令が出ていた。私が組合長をしていた組合事務所を拝借することにして、店と工場のを毎日運ぶ。興四郎君が毎日手伝いに来てくれて助かった。オート三輪一台に仏壇その他をできるだけたくさん積んで門部(茨城県)へ運んだ。

四月一日、徹男は門部小学校へ入学。習字用の紙があったので三百枚持参して寄付した。阿佐谷へ帰ってみると、店は破壊されて荒れ果てたまま。二十年間苦心さんたんして築いた店が、なんたるありさまかと、泣けてしかたがなかった。東京の移転先には益夫とお手伝いさんと三人で防空壕を掘ったりして、私は益夫と日本無線にできるだけ通った。菓子のほうは実績で材料が来たが、工場がないので紅家(親戚の菓子屋)でつくった。

五月二十五日の晩の空襲も大変だった。阿佐ヶ谷駅周辺もやられ、石井薬局、都湯のあのあたり全部と代官屋敷の相沢邸もやられた。永福町の青柳さんの店もやられた。そのとき益夫と成宗田圃へ逃げたが、もう大丈夫というのでバケツを持って阿佐ヶ谷駅に駆けつけたが、だいたい火事は収まっていた。石井輝太氏は、強制疎開のほうはまだ幸せて、火事がいかに悲惨であるかを語っておられたが、お互い元気でがんばりましょうと励まし合った。」

(『足あと-坂井寅三郎自伝-』より)

(平成27年8月 取材:坂田)



## 空襲を受け生まれた絆



## 藤重 トリさん

昭和3(1928)年7月、永福町生まれ。

高等女学校へ入学後すぐに学徒動員が始まり、埼玉県朝霞市の工場、三鷹の横河電機で働く。

永福町で終戦を迎えた。現在87歳。

昭和3(1928)年、永福町で生まれました。家は代々続く農家で庄屋をしており、まわりに農家が48軒、神田川に沿って田んぼが広がっていました。家の裏手には竹やケヤキ、クヌギの雑木林があり、春には筍を掘り、お茶も作っていました。



戦前の家の様子。今も大きなケヤキの木と蔵が残っている

昭和16(1941)年、大宮尋常高等小学校(現・大宮小学校)を卒業し、高等女学校に入りましたが、夏には学徒動員(参照▶P20)が始まり、勉強はほとんどできませんでした。毎朝、新宿駅で友だちと待ち合わせ、埼玉県朝霞市の工場で兵隊さんの洋服を縫っていました。1年後、三鷹の横河電機に移り、飛行機の計器を作る仕事をしました。私は身体が小さいのでハンダ付けでしたが、大きな方は女性でも鉄板を切ったりしていました。

戦争が激しくなってくると、横河電機や中島飛行機工場のある三鷹の辺りは空襲(参照▶P18)が多くなりました。ある日、中央線も井の頭線も止まってしまい、三鷹から家まで歩いて帰ることになりました。途中で空襲にあい、B29(参照▶P20)の操縦士の顔が見えるほど低空で飛んできました。まわりは畑ばかりで逃げるところがなく、防空頭巾をかぶって小さくなっていましたが、いつ撃たれるかわかりません。竹藪を見つけて逃げ込んだ時はほっとしました。ようやくうちに着くと、私の帰りが遅いのを心配していた母が泣いて迎えてくれました。寒い日だったのに汗びっしょりで、頭から湯気がぼうぼう出ているのです。ほんとうに命拾いして帰ってきました。

歩いて帰ったのはその時だけで、その後は横河電機に泊まることもありましたが、そのうち集まるのも危ないと、通うこともなくなりました。

## ■ 茅葺屋根に上がって火の粉をはらう

昭和20(1945)年5月25日の空襲の時、家には祖父と両親、叔母、姉弟4人の8人で暮らしており、一番下の弟は長野に疎開(参照▶P18)していました。夜中に空襲警報(参照▶P20)が鳴り、焼夷弾(参照▶P20)が落ちてきました。家のあちこちに火の粉が落ち、みんなで消しにかかりました。わたしも姉とふたりで茅葺屋根に上がり、火の粉をむしりとりしました。どうやって登ったのか、必死だったので覚えておりません。

永福町の駅前にあった井の頭線の車庫(現在バスの車庫)は火の海になり、電車も焼けてしまいました。家のまわりもみんな焼けてしまい、残ったのは私の家のほか2、3軒だけ。女性が一人、焼夷弾の直撃を受けて亡くなりました。空襲後、父が家の周りに落ちた不発弾を何本もリヤカーに乗せて運んでいたのを覚えています。



家で姉弟と(左端がトリさん)

## ■ 助け合って生きていく

玉音放送(参照▶P20)を聞いた時、祖父は皇居へ向かって平伏しました。戦争が終わってうれしくもありましたが、女性は男の服装をしないと危ないという噂が出たりして、これから日本はどうなるのかと不安でした。

戦後は、父の兄弟の子どもたちを預かって、みんなでご飯を食べていました。蔵も無事で、食べ物もなんとか残っており、みんな助け合って生きていました。絆はそういう時にできるのだと思います。

周りの家も焼け残った蔵や、掘っ立て小屋で生活をしていました。戦後しばらく経って近所に簡易住宅ができ、焼け出された方が移ってきました。今、永福小学校になっているところです。ほとんど勉強することなく女学校を卒業し、おしゃれをしたくてもできず、青春はありませんでした。

(平成27年8月 取材:坂田)

## 焼野原になった高円寺からの再出発

### 宮城 良子さん

昭和16(1941)年当時、13歳。昭和22(1947)年から区役所職員として40年勤務。

戦争体験の募集には、近所の人の勧めがあって書きました。従兄妹や兄弟も亡くなり今はひとりですが、長唄(三味線)やカラオケを楽しみながら暮らしています。



#### ■ 戦中の青春時代

昭和20(1945)年当時、私の家は今の住所(高円寺)に父が下宿屋を開いていました。今のマンションみたいなハイカラのものではありませんが、廊下にガス台があり炊事が出来るようになっていました。1階には6畳2間と8畳、私たちが住んでいた8畳と階段下の3畳・4畳がありました。下宿の人たちの水道や便所は個々の部屋にはついていませんでした。2階には南向きの8畳と6畳、西側に4畳、奥の北側に8畳・6畳と結構広がったと覚えています。

中庭には防空壕(参照▶P20)がありました。空襲警報(参照▶P20)のサイレンになると防空壕に入りました。中に入ると土の匂いがしました。父の後妻さんが弱かったので私は家の手伝いをしていましたが、たしか18歳位のころから近所の郵便局にアルバイトにいった様に思います。戦前の郵便局でいまの駅前郵便局とは違います。

大人として独立したということで、家族で住んでいた1階から2階の南向きのひと部屋に入ることになりました。物のないときでも青春時代だったので、後妻さんが古着を直して作ってくれた草色の晴れ着を持ち込んだりして、その部屋を私なりに住みよくしたいと思いました。でも今みたいな電気ではなく電球で、それに傘をつけ、黒い布をかぶせて光が外にもれないようにしていたと思います。

#### ■ 実家が焼けた高円寺の空襲

私の家の前は、現在は高円寺駅に行く道路が南に向かってありますが、焼ける前は今の千恵ビルと西側のパチンコ屋の駐輪場のところまで、外国帰りの、兄弟で曲尾さんという方が白亜の建物を2軒建ててお住みになっていたと思います。建物の南側に広い庭園がありテニスコートなどあったと記憶しています。たまに同じ年頃のお嬢様に呼ばれて遊んだことを思い出します。また駅は今みたいな高架ではなく踏切だったと覚えています。

昭和20(1945)年5月25日にたしか午後8時頃だと思いましたが空襲警報がなり、もう防空壕に入るところではなく、防火ずきんをかぶり、防火用水の上にあったバケツに水を汲み、火はたきをもって外に待機しました。焼夷弾(参照▶P20)が空からばらばらと降って来た様に思いました。

私の家の北裏にMさんというおばあさんが住んでいて、その方は昔、舞台女優さんということで元気な方でした。その方の知り合いが中野区の大和町(早稲田通りの北、そこは焼けなかった)の奥に住んでおられるということで、一応、Mさんに連れられて大和町まで逃げていきました。同じ中野区でも陸軍関連の施設があった方面は、集中攻撃がきびしかったようでした。今は高円寺の駅の北口は広い広場になっていますが、当時は伊藤さんの森といって、うっそうとした大木が生い茂っていて、駅までのその道を通るのが、昼間でもとてもこわかったと覚えています。でも戦時中は甘い物がなく、朝7時に売り出される甘納豆が欲しくて、夜中の3時ごろから並んだのを思い出します。

大和町に一晩泊めてもらい次の日見ると、東は今の環七の西より北は早稲田通り、西は今の高円寺北三丁目(馬橋)、南は青梅街道まで、全部丸焼けになっていて、まだ家々がくすぶっていました。私の家もなくなりましたが、父が軒下を掘って入れておいた筆筥が一棹、火災からまぬがれ残りました。中には母たちの思い出の品が収められていました。東京では住んでいられないので、父の兄弟の山梨県勝沼町に半年ほど疎開しました。人間て有難いもので、辛いことは忘れてしまうので、今の生活を本当に有難いと毎日感謝の心で暮らしています。



インタビュー

# 特産「高井戸節成キュウリ」の栽培も減り、さびしかった

## 内藤 昇さん

昭和3(1928)年、豊多摩郡高井戸町(現・高井戸西)に生まれる。

府立農芸学校(現・都立農芸高校)在校中の昭和19(1944)年、勤労奉仕で北海道援農に赴く。

昭和20(1945)年4月、東京農業教育専門学校(後に東京教育大学に包括。現・筑波大学)に入学。

卒業後、実家の後継者として本格的に就農。財団法人杉並正用記念財団理事長。

### ■ 戦前、戦中の区内農業

私は昭和3(1928)年、高井戸で四代続く農家の長男に生まれ、幼い頃からよく農作業を手伝っていました。戦前の杉並区は農業が盛んで、都内でも有数の野菜の生産地でした。中でも高井戸付近で作られる野菜は、東京の西側で作られることから「西山もの」と呼ばれ、特産の「高井戸節成キュウリ」で有名でした。主食の生産も行われており、中央線の北側は陸稲や麦、南側は水田を中心に裏作で大麦や小麦を生産していました。現在のシャレール荻窪(旧・荻窪団地)や、旧・阿佐谷団地一帯も、元々は田んぼだったのです。

その後、戦争で食糧統制が開始されると、農林省(当時)が各農家の穀物の作付け状況を調査し、生産物の供出を求めるようになります。検査官が農家を訪れて、大麦、小麦を何反作っているかを把握し、面積に見合った穀物を供出するよう義務づけました。主食になるサツマイモやジャガイモの栽培が奨励され、特に干したサツマイモは様々な加工原料に使われたため、供出の対象とされました。穀類生産重視の国策に伴い、区内の野菜の作付けは減

り、戦時中は、干ばつに強くて主食になるアワやキビが盛んに作られるようになりました。



高井戸節成キュウリ 現在は研究用に栽培されており市場に出回ることはない(写真提供:すぎなみ学倶楽部)

### ■ 16歳で北海道援農へ

昭和16(1941)年、私は高井戸尋常高等小学校(現・高井戸小学校)を卒業し、今川町(現・今川三丁目)の府立農芸学校(現・都立農芸高校)に入学します。しかし、その年の12月に日本は太平洋戦争に突入。学習時間が減り、3年生になると厳しい軍事教練(参照▶P20)が始まりました。学内には軍服を着た配属将校がいて、私たち学生は時代遅れの三八式歩兵銃と

いう鉄砲を担いで、時には将校に殴られながら行軍しました。

そして4年生に進級した昭和19(1944)年の5月、私たちは食糧増産を目的とした学徒勤労奉仕の一環として、世田谷区の府立園芸学校(現・都立園芸高校)の生徒たちと一緒に、北海道の農家に赴くことになりました。援農先は、日本海に面した苫前郡苫前村(現・苫前町)で、当時の稲作の北限でした。慣れない土地で学生たちが必死に稲作を手伝う様子は評判となり、当時、東京の新聞に「援農も板につく」というタイトルで報道されました。



昭和17年5月、農芸学校2年の内藤さん(左端)。この茅葺屋根に焼夷弾が落ちた

約3か月の北海道援農を終えて8月に帰

京すると、休む暇もなく9月から翌年の1月にかけて村山貯水池(東大和市)のほとりにある松林で、軍用機の燃料に使うという「松根油」を採取する作業に従事。その直後の3月には、国策により通常5年制の学生生活が1年繰り上げとなり、4年間で農芸学校を卒業することとなりました。

### ■ 戦時中の高井戸

昭和20(1945)年4月、私は当時、目黒区駒場にあった東京農業教育専門学校に入学します。しかし間もなく、5月25日未明に東京を襲った大空襲(参照▶P18)で校舎は焼失。終戦まで休校となってしまいます。この空襲は、高井戸地域にも大きな被害をもたらしました。私たち家族は防空壕(参照▶P20)へ避難する途中で爆撃を受け、母屋の茅葺屋根に焼夷弾(参照▶P20)が撃ち込まれました。押入れの中に火の手が上が





高井戸地域の防空演習

り、室内に広がった火を布団で押さえて必死に消し止めましたが、3番目の弟は洋服に燃え移った火で火傷を負い、私も目の前で焼夷弾が爆発して、その破片が刺さり負傷しました。あれから70年経った今も、私の右足と右腕にはその時の金属片が入っています。

### ■ 様変わりした杉並の農業

のどかな農村地帯だった高井戸でしたが、戦時中は軍事色に包まれていました。隣組(参照▶P18)を中心に、空襲に備え



戦中に撮影された松林禅寺の様子。後ろの釣鐘が供出された

た防空演習が至るところで行われました。松林禅寺(現・高井戸東三丁目)の釣鐘は、戦時の金属類回収令により供出されました。

戦争が終わり、専門学校を卒業した私は、昭和24(1949)年、家業を継いで本格的に就農しました。徐々に

農業の機械化が進み、わが 昭和30年代、耕耘機で農作業する内藤さん家でも耕耘機(こううんき)やオート三輪車を導入するなど、農業を取り巻く環境も様変わりしていきます。食生活の洋風化に伴い、昭和20年代後半にはカリフラワーやブロッコリーなどが区内で生産されるようになりました。そして昭和30年代半ばには、高井戸駅南側にあった田んぼが都営住宅に変わり、続いて訪れた高度成長期の都市化の波に押され、区内の農地は、どんどん宅地に変わりました。

私の家も昭和47(1972)年から、テニスコートを経営しています。鍬(くわ)をラケットに持ち替え、先祖から受け継いだ土地の活用の仕方は変わりましたが、生まれ育った高井戸地域への愛情は変わりません。戦前からこの地に住む者として、これからも地域振興に貢献していきたいと考えています。

(資料提供:内藤昇さん)

『庭球場の農夫』 内藤昇 著

『庭球場の農夫(追想)』 内藤昇 著

(平成27年10月 取材:内藤じゅん)

